

## 第 1 章 城東・城北地区の地域の特徴と地域形成史

現代都市生活は、交通、情報通信、水道、電気、ガスなどの物的・技術的な装置の膨大な集積によって支えられている。それらの複合体は、物流、労働力、情報、エネルギーなどの各種のフローを統御する技術的・領土的・社会的な調整システムとして、都市化の歴史的な各発展段階を規定してきた。

廃棄物処理に代表される資源循環システムもまた、以上に挙げた様々なフローの調整システムの一環に他ならない。資源循環システムは、都市における生産部門や消費部門から排出される諸資源を、回収・運搬・集積・選別・加工・再商品化/廃棄物処理する一連の過程である。こうした再生資源の循環は、そのマテリアルを規定する産業構造や消費生活の様式によって性格付けられると同時に、その処理に一定の物的環境が必要であるため、都市の空間構造とも深く関わりながら形成されてきた。また、資源循環システムは、その運用と制御をめぐる、固有の産業集団、行政の統治機構、地域住民の組織的活動といった社会的担い手を派生させてきた。以上のように、技術、都市空間、社会組織の一定の組み合わせによって働く資源循環システムは、都市化過程の新しい段階を迎えた今日、どのような変動を来たしているのだろうか。

本研究では、消費生活から発生する各種資源、特に繊維、紙、金属などのリサイクル事業、及びそれを担う社会的担い手を事例として、都市における資源循環システムと地域社会の変動に関する調査研究を進める。本研究で都市の資源循環と地域社会の関係は次の二つの側面から問われる。

第一に、近代東京の資源循環システムの発展と密接に関わって形成されてきた再生資源の回収・加工・売買を行う専門的な社会集団の分析である。都市の廃棄物の収集と処理を専門にする社会集団は、都市雑業層の参入する部門の典型として、世界の各都市において広く見られる。東京の場合でも、20世紀初頭から始まる急激な都市化は、近世の都市生活以来資源循環を担ってきた特有の社会集団の膨張を促した。近代東京における彼ら再生資源取扱業者は、工業化に伴って日用消費財産業の集積が進んだ城東地域に、そうした地域産業の発展と相互に関連しながら集積していった。そこでは産業と密接に関わる固有の地域社会を生み出し、再生資源取扱業者もまた、そうした地域社会の主要な担い手の一角となった。そうして形成された地域社会は、高度経済成長期以降、産業構造の転換やそれに伴う資源循環システムの質的な変容、そして地価の上昇や工場立地の制限などによって、大きくその様態を変えてゆくことになる。再生資源業界は、大量消費・大量廃棄の生活様式の定着、自治体による清掃事業の充実化などによって衰退の一途を辿り、仕切り場を中心とするその集積構造もまた消滅してゆくのである。

本研究が都市の資源循環と地域社会の関係を見てゆくうえで着目する第二の側面は、こうした高度経済成長期以降の、資源循環システムが大きく転換してゆく中で浮上してきたものである。各種の廃棄物問題やそれに対する新たな資源循環システムの構想が問われる

中、衰退を続けていた再生資源業界は、そうした新たな動きの一端を担うべく模索しはじめている。首都圏における地域内の資源循環を構築する新しい取り組みのいくつかにおいては、再生資源取扱業者がリサイクルに関わる様々な住民活動の展開といかに連携すべきかが図られている。こうした動きの中には、リサイクルに始まってそれと相互に関連する地域の様々な課題への取り組みに発展してゆく可能性を秘めたものも存在する。このような、リサイクルからまちづくり活動へ展開してゆく各地の取り組みを中心に、そこでの再生資源業界、市民運動、自治体のインターフェースの変容を検討する。

本報告書は、第一義的には、上記のような目的をもってはじめられたが、そのとくに第一の側面との関連でいうと、資源循環システムと資源のリサイクル・プロセスにおける諸集団の活動と集積、その再編過程を通じて、東京都内の城東・城北地区の一角における社会特性を浮き彫りにしようという意図を同時にもっていたといえよう。

近代東京の都市化過程における空間的動態をみていくとき、地域産業の集積と移転を分析することは欠かせない作業であるが、とりわけ再生資源取扱業をめぐっては、まだ十分な調査の蓄積がなされているとはいえない。

再生資源取扱業は、次章以下でみていくように、非常に多様な側面をもっているが、常に市場の需要に敏感であるところにその特徴がある。市場の需要を敏感にキャッチし、それに敏速にかつ的確に対応することによって、場合によっては巨大な利益が引き出される構図がある産業だからである。ある地域から出てくる廃品を選別し、別の特定の産業・階層・地域の需要に応えられるものとして流通させることにより利益を生じさせていく産業。プリミティブに言えば、これが再生資源取扱業における利益産出の構造である。市場の需要に対する幅広い視野と感性が、より大きな利益を産み産業経営を安定させる原動力になる。これの現代における典型的な例が、古着産業である。廃品古着のなかに含まれた一片のデニムのシャツ、ジーパンを集中的に取り出し、魅力ある形で市場の需要を喚起することで利益を生み出すのが古着産業の妙味である。そこからわかるように、もちろん、再生資源取扱業は、単層の集団や産業組織からなる産業ではなく、利益が出れば出るほど、非常に多層で複合的で専門的な性格を併せもつ集団や産業組織の集まりという性格を発達させていくことになる。第2部後半でみていく故繊維産業の事例はそのひとつの典型とみることができるだろう。

さらに、再生資源取扱業の産業集団のなかには、決して高度ではないが、市場の需要に的確に応えるために加工を施し、別の再生利用方法を開発するさまざまなノウハウを発揮するケースやひとびとが出現する。第2部前半に製紙業・ダンボール製函業と並んでインタビューで出てくる「めんこ」製造業の事例はそのひとつであるし、また第2部後半のウエイスト業もそのひとつである。また、今回あまり扱ってはいないが、再生資源取扱業のうちの、機械や金属部品などの簡易加工・修理・製造の分野も、類似した構造をもっているといえよう。アジア諸国における産業の発展段階では、このような廃品や廃物を利用した修理加工・簡易製造領域における技術蓄積と原資本蓄積が、産業テイクオフの起爆剤に

なるプロセスがある。こうした事例を総合的にみていくと、日本の都市化・産業化の過程でも、こうした再生資源取扱業のもつ役割とその動向にはもっと注意が払われてよいのではないか？

東京の場合、こうした再生資源取扱業が集積した地域のひとつの核が足立区・荒川区の一角であった。その集積の広がりや産業連関上の影響力がどの程度であったかは、こんごの調査の結果を待たざるをえないが、印象としてはかなり巨大なものになるのではないかと考えている。東京城北地区にあたる北区を同時に対象に選んだのは、もちろん、北区が展開している独自の先進的なりサイクル行政と活動の意味を考えてみるためではあるが、それと同時にその広がりや影響の仕方をある程度まで見ていきたいと思ったからでもある。北区南部に集積する機工街は、繊細な技術を発達させた軽機械、部品修理のまちであるし、北区にはなんとといっても巨大な製紙資本である王子製紙があり、また歴史的にはいくつもの製紙会社を発展させてきた地域である。北区と足立区及び荒川区の関係は、産業資本による資源調達と取引関係の歴史的な展開からみれば、足立区・荒川区を中心に再生資源を回収・集積したものを、北区にある工場群が原材料として引き受け加工修理製造するという一般的な図式があてはまる。しかし地理的な広がりという点では、さまざまな交差が見られるし、産業上の集積という点でも、多段階の再生資源取扱業のうちどこまでを扱いどこから次の段階に引き渡すか、それぞれの段階の産業集団のどの部分がどの地域に集積していくかという問題が残る。時代の大きな流れのなかで進行する、このダイナミックな変動は地域の性格にこれまで大きな影響を及ぼしてきたに違いない。

また、高度経済成長期以降、東京の城北地区・城東地区の工業産業集積は、徐々にその外周部に移行していくプロセスをたどる。それは、東京大都市圏の拡大と人口集中、東京中心地域の情報産業化・ソフト化・サービス化の波と関連しながら進行していく。東京都における公害規制・工業立地規制と住宅地化・商業化の波が、零細・小工場の閉鎖・移転と、中規模・大規模工場への拡大・展開を促進させたため、埼玉県南部地域一帯はその大きな受け皿として成長した。東京城北地区・城東地区から、埼玉県南部にいたっての地域発展史をみていくと、こうした零細・中小工場群や技術技能的な職業群に関連する経済が地域社会に強い影響力をもち続けた様子がよくわかるのである。

これまで、東京都およびその周辺を舞台にしていくつかの地域調査を重ねてきたが、時代の流れのなかでみせるそれらの地域の多様性に常に驚かされてきた。それは、それぞれの地域がそれぞれの産業蓄積と住民の個性的な活動を通して、独特な地域の文脈をつくりあげてきたからであるが、同時にその時代時代における産業と政治のせめぎあいのなかで、ダイナミックな変貌を遂げそれを地域の襞のなかに取り入れてきたからに他ならない。そのうちでも、台東区北部から、墨田区、江戸川区、葛飾区を含めた城東地区、城北地区の地域の特徴は個性的である。同じ工業集積という点で比較しても品川区・大田区に代表される城南地区にみられる電気・機械加工技術などの発展と技術集積による産業地域の発展とは異質な性格をもつ。それが何によるかはさらに調査を蓄積させていく必要があるが、

今回の再生資源取扱業を基盤にした生活加工技術の展開と都市需要に柔軟に対応する低資本による雑多な産業集積という切り口は、それらを見えていくうえでのひとつの重要な視点となりうるだろうと思っている。